20 世紀前期的中国与東亜国際関係

講　師 ：臧　運祜　氏（北京大学副教授）

日　時：2010 年 12 月 22 日(水)　17:00－19:00

場　所： 慶應義塾大学三田キャンパス大学院校舎８階　東アジア研究所共同研究室１

言　語： 中国語

概　要：

第 6 回の全体研究会では、日中戦争時期の日本の対中国政策を専門とする北京大学の臧運祜氏を招き、1900 年の義和団事件から 1949 年の中華人民共和国建国までの中国と東アジア情勢について討論を行った。

臧氏は、19 世紀から 20 世紀前期にかけての東アジア情勢を概観した後に、当該時期を①清末民初期、②第一次世界大戦前後、③国民革命時期、④中国の抗戦期・東アジアでの第二次大戦期、⑤東アジア冷戦期・中国革命の勝利、の 5 つの時期区分に分類し、中国の侵略への対応と近代ナショナリズムの台頭の視座から中・東アジア関係をを分析した。臧氏によれば 20 世紀の始めの 20 年間、中国は屈辱的な局面にあったが、五・四運動を転機として国民党・共産党の指導により局面の転換を図った。また、当該時期の東アジア国際関係は米・日・ソによる影響が大きく、中国にとっては米日中関係を好転させることが主要な外交課題であった。以上の展開を詳述したうえで臧氏は、中国と東アジア国際情勢がいかに密接に連動していたかを論じ、中国史の世界史的意義を主張した。

以上の臧氏の議論は、中国の 20 世紀初頭の課題を社会主義革命史ではなくナショナリズムの観点から再構成した点に新味があった。そのため臧氏の議論に対してフロアからは、この時期の中国外交をいかに評価するかという解釈に関する質問が多く挙がった。「受動的適用」と「積極的挑戦」の混じり合いであった中国外交をどう評価するか、世界のナショナリズム革命の一翼を中国が担ったと評価してよいのか、ナショナリズムは近代中国で肯定的な評価を得ているがマイナス面はどこにあるか、国民党の与えた作用をどう評価するか、等である。臧氏は、近年、中国国内では 20 世紀前半の対外関係をナショナリズムの歴史観で捉える事が多くなったが、中国と日本・欧米のナショナリズムは理解が異なること、その理由としてナショナリズムの目的である「国民国家」が中国には成立していないが国家成立には寄与したことなどを指摘した。また現在のナショナリズムは両刃の剣であること、政府は政策的なバランスを取らなければならないことなどを丁寧に説明し、最後に国民党の評価にも変化が出てきたことに触れて言を閉じた。中国近代史の最新の研究動向について意見を交わした興味深い研究会であった。